

2014しずおか木造塾第2講座（木材の品質・住宅デザイン）

平成26年10月18日（土）に静岡市の県産業経済会館で「2014しずおか木造塾第2講座」が行われた。

I 「山長商店の仕事について」

榎本崇秀 副社長

■山長商店とは

和歌山県で1700年頃（江戸中期）に創業し初代は備長炭と山林所有を始め、明治から林業、山林所有面積は5,000haに至り製材業を、平成9年からはプレカット加工までを行うようになった。

現在では植林や育林といった林業から、製材やプレカット加工までの一貫生産体制を確立し、自然素材特有の品質のばらつきを担保するため約3ヶ月分の製品在庫を常に準備している。国産無垢材の安定供給を目指し、首都圏を中心とした地域工務店に年間900棟分のプレカット加工を供給している。

■無垢材を使ったプレカット

平成2年頃からプレカットが登場し、木材の流通経路が変化した。木材選択の主体が大工・工務店からプレカット工場に移り、従来の製品市場の役割と売上が大きく減少し、構造材として集成材がよく使われるようになる。山長では、代々受け継いできた山林とその循環を維持していくために自らプレカット材の販売を行うことにした。そして「紀州の無垢材」で「複雑な現しの木の家」をプレカット加工で提供するために努力している。

■木材の品質表示

木材はJAS製品でなければ、すべて無等級扱いになり、JAS製品である集成材に対抗して、「高温蒸気減圧式乾燥機」を導入し、国産スギ平角材で含水率20%を達成する乾燥プログラムを開発し、日本初の機械等級区分JAS製品の杉・ヒノキ開発に成功した。

■見える化

性能品質の「見える化」と一貫生産体制による履歴・流通の「見える化」により、住ま

しずおか木造塾委員会 委員長 清水 利至

い手が納得・安心し、工務店は国産の良い木で家を建てれば、工務店の差別化、信頼度の向上につながり、地方の森が都市の市民を守り、都市の市民が地方の森を育てる、『循環型社会』が成り立つことになる。

II 「『小さな家』の70のレシピ」

建築家 伊礼 智

■心地よい居場所に惹かれて

日本一の和風旅館“俵屋旅館”の入口は控えめで地味だが、そのアプローチは、明→暗→明、低→高→低と変化ある移動空間で、短い距離で体験でき、これは家の中でも使うことができる。

俵屋のアーネストスタディという空間は、天井の低い包まれるような空間で、とても落ち着く。

仕事で、小さな家の中にさらに間仕切りを入れて2帖の和室をつくり、奥行きを感じるようにして、広々していなくても対角線に視線が通ったり、回れる動線は広さを感じさせてくれる。丸テーブルは回りを動けるのが好きでよく使う。

■仕事を通して

「那珂湊の家」は、性格の異なる空間をつなげ、単純なプランでも高低、明暗でなかなか楽しい空間。

「15坪の家」は、小さくても、あちこちで好きなことができるよう建築と家具がまざっている感じである。

「守谷の家」は、軒先は2100mm、人のスケールに近づけ、家を低くすることで、かっこよく見える。天井には照明器具をつけず、入ってくる光を絞ったほうがきれいに見える。

i-works1.0、パッケージ化したプレタポルテの家。パターン化されたシンプルな空間に家具を使って仕切るシステムを提案した。

■小さな家

小さな家は、全部をがんばらなくてもいい。一ヵ所でもいい場所があればよくなります。住宅は心地よい小さな居場所の集合体である。